

ドイツの庭園

ドイツ人は、緑に囲まれていると幸せを感じる国民です。何百年もの間、ドイツ人は農耕民族であり、自然とともに、また自然から恵みを受けて暮らしていました。19世紀の産業革命を受けて、都市部が成長し、工場制手工業が新しい生活基盤となりました。労働者居住区が手狭になり、緑地もなくなっていきました。同じく、子どもたちが遊べるスペースもなくなっていったのです。この状況をうけ、ライプツィヒの医者であり大学教授であったモーリッツ・シュレーバー (Moritz Schreber) は、市内の芝生区域を子どもたちの遊び場として確保することに尽力しました。彼の死後、この芝生区域はシュレーバー広場と名付けられ、学校の授業でも利用されるようになりました。そこにビートを植え、子どもたちは庭仕事も学ぶことができるようになりました。1869年、子どもたちの親たちがそのビート畑を譲り受け、家庭菜園を営むことに決めました。その後、このビート畑は柵で囲われ、園亭が建てられました。子どもたちの遊び場として確保されたビート畑は、シュレーバー菜園と呼ばれる庭園になったのです。彼らはその後、協会を設立し、その協会の名前もシュレーバー協会としました。始まりとなった庭園は現存し、「Dr. Schreber」と呼ばれています。1891年には、ライプツィヒ市内に同じような協会が14あったとされています。



特に、第二次世界大戦後には、国民に食べ物を提供するため、多くのシュレーバー菜園が新しく作られました。市内には人々が暮らせるスペースが限られていたため、菜園の園亭で寝泊まりすることもできました。今日では、日頃の住まいを出て、新鮮な空気の中でひとときを過ごすために、人々はシュレーバー菜園を利用しています。体を動かせることを楽しみにしている人もいれば、ただ静かなひとときを過ごすことを楽しんでいる人もいます。また、パーティをしたりバーベキューをしたりするにも格好の場所でしょう。シュレーバー菜園には、そこに人々が集うという社会的役割もあると言えます。また、ここ数十年で、農薬を使っていない果物や野菜が望まれ、食品の安全を求める声が高まっています。野菜や果物は、自分で栽培したものであれば、その安全性が保証されるのです。